

小指の花びら【4】

たすく

このところレムには毎日香里さんが来ている。
そして毎晩信じられないくらいのお金を落として帰っていく。
私はそのことで一度綾姉に相談したのだけれど、

「そういう年頃なのよ」

と言ってそれ以上取り合ってくれなかった。
綾姉は帳簿を付けるのが楽しくてしょうがないらしく、一日に何度もそれを見ては満足げににやにやしていた。
綾、あんたはお金より大切なものに気付いていないのね……と綾姉風に言ってみたくはあったけど、
本気で怒られそうな気がしたのでやめておいた。

そんなことよりも私が気にしていたのは香里さんの態度だ。
あっという間に常連客の仲間入りをして、今ではレムのムードメーカーになりつつある彼女だけれど、
いささか人の好き嫌いが激しすぎると思う。

それは例えばトーコのことを「天使ちゃん」と呼び、ひとみちゃんのことを「猪」と呼ぶことだ。
彼女は好き嫌いの基準を「容姿」ひとつに限定しているようだった。
そのため他のお客さんの気分を悪くしてしまうことがよくあったのだ。

「あの子、自分のことはどう思ってるんだろーね？」

マイさんがカウンターから身を乗り出すようにして私に囁いた。
彼女はひとみちゃんやトーコほどではないにせよ、よくお店に顔を出してくれる常連さんだ。
香里さんを中心に盛り上がっているリビングから逃げ出し、今はここでちびちび飲んでいる。
マイさんは香里さんに「あひる」と呼ばれた。言葉で聞く分にはかわいい呼び名だったけど、
下唇を上に引っ張られたような口をしていた彼女にとって、それはただの悪口でしかなかった。

私は香里さんたちの方へ目をやった。綾姉とひとみちゃん、
そして久々にお店に来た「ゆうこ」「ひろこ」という正真正銘の女の子二人組がトランプで遊んでいる。

彼女たちの名前は漢字で書くと「裕子」となり、そのせいか双子のように仲が良かった。

「大富豪だってさ。ミキちゃん知ってる？」

マイさんにそう言われて私は驚いた。

大富豪と言えば小学校のころからよくやっていたトランプゲームの王道だったからだ。

四人以上でトランプ＝大富豪という前提すら私にはある。

マイさんは私より二周り近く年上らしいので、なかなか共通の話題を持つことがなかった。

でも大富豪くらいは知っているだろうと思ったのだけれど、世間は広い。

「どんでん返しを楽しむゲームですよ。今はゆうちゃんとひろっちが大富豪と富豪で、貧民、ど貧民であるひとみちゃんと香里さんは、自分の持っている強いカードを富豪たちに差し出さなきゃ

いけないんです。その不利な状態からいかにして勝ち上がるかっていうゲームなんですけど」

「綾姉は？」

「綾姉はペナルティなしの平民。いわゆる、その……奪いも奪われもしない人です」

「普通のひとなんだ？」

私はしぶしぶ頷いた。気にしすぎだ。

何かの気配を感じて後ろを振り向くと、フライドポテトがいい具合に色付いている。

からりと揚がったそれを大きな金属ボウルに放り込んで、塩とカレー粉ををまぶして大きく振った。

料理は速度が命。私は平行して作っていた豆と野菜のスープを器に入れ、オーブンからグラタンを取り出した。

ふたつの器に粉チーズを盛り、カレー味のフライドポテトにはパプリカを振って完成。うん、おいしそうだ。

出来上がった料理を持っていくと、ちょうどひろっちが大富豪になったところだった。都落ちはルールから外されているらしく、ゆうちゃんとひろっちが入れ替わった形だ。

「ほほほ、私たちの絶対王政は崩れなくてよ」

「あら、料理がきたわね。頂きましょうかひろこさん」

「それはあたしが頼んだえびグラタンじゃないのー！」

ひとみちゃんが叫んだ。彼女は大貧民になってしまっていた。

「何言ってるのよ、これは献上品でしょ？」

「そうよ。私たちが国を治めているから、あなたたちが何も考えずに生きていけるのよ。言ってみればこれは、税金みたいなものかしら」

どうやら物語が出来上がっているらしく、二人とも芝居がかった喋り方をしている。香里さんは私にドンペリの口ゼを注文した。彼女はメニューリストに載っているもの以上に高いものがあることを知らない。それはたぶん彼女にとって良いことだ。

リビングに二つの黄色い歓声が上がった。

「あんたたちに献上してあげる。せいぜい酔っ払って墮ちてしまおうがいいわ！」

「まあ、感心な貧民ね。でも私たちはこんなもの飲み飽きているのよ！」

と言いつつ嬉しそうにグラスを傾けるところが、二人のかわいいところだ。本当の女の子は、やっぱり本当にかわいらしい。手首にも、首筋にも、当たり前なんだけど男らしいところが全く無くて、私の心を騒がせる。シャンパンなんて。私はそんな事を考えながら、キッチンへ戻っていった。

「あの子、きっと危ない仕事してんのよ」

マイさんが小声で言った。私はそれに対して何も言わない。香里さんは人に言えないような仕事をしているわけではなかった。彼女は若いながらも、自分は年商一億を超える会社の社長だと言っていた。ウェブアプリケーションの開発をやっているとか、中国に支社があるが、そちらはリモートで管理しているとか、私には分からない言葉で色々と説明してくれたけど、私はどうもその話に現実感を持てなかった。

仕事の内容が理解の範囲を超えている。それでも彼女のお金の使い方を見ていると、とにかくたくさん稼いでいるんだな、ということだ

けは実感できた。

どこで誰に買わせたのかはわからないけど、毎日高そうなドレスや化粧品を持って来て、あとは綾姉に任せる。

そうすると綾姉が香里さんをトータルコーディネートして、やはりそこに高いお金がかかる。私が今まで見てきた大人たちの中にもたくさんお金を持っている人は何人かいたけれど、彼らと香里さんではその使い方が違うようだった。

香里さんはつたなかった。お金を使うことに慣れていないのだ。

それは誰かにお酒をご馳走するときのタイミングや、トランプゲームを楽しくするために持ち出すドンペリが

象徴していた。私はそんな彼女を見ると心配になってしまう。

お金がもったいないということではなく、彼女が何も得ていないような気がしたからだ。

私は新浜さんの横顔を思い出す。

一杯のウイスキーの、色や香り、そして変化を味わう時の彼の瞳。

私がお酒を何杯飲んだって、あんな顔はできない。

「悪い子じゃないんだろけどね、ただなんか、むかついちゃうよね」

マイさんは心が広いなあ、と思った。

私は香里さんのことをむかつくとは思わないけれど、だからと言って悪くないとは言い切れない。

彼女は何か良くないものを抱えているような気がするのだ。

「革命に備えて洗い物しなきゃ」

私がそう言うと、マイさんは首をかしげて後ろを振り返った。

香里さんが四枚のカードを誇らしげに掲げていた。

綾姉はお店の時計を眺めながらため息をついた。

「今日はもう、新浜さん来ないわね」

彼女はへなへなと崩れるようにしてカウンターにもたれかかってくる。

私は少し迷ってから、ひろっちたちが余らせたドンペリをグラスに注いだ。

綺麗な色に見とれていると、綾姉はそれを一気に飲んでしまった。

「ビール頂戴」

格好いいというか、ロマンがないというか。
私は綾姉のグラスを受け取ってごぼごぼとビールを注いであげる。
自分のグラスにはドンペリを入れて、綾姉と乾杯した。

「おつかれさま」

ガラスの澄んだ音で締めくくる仕事なんて、あまりない。
そういう意味では私たちは幸せだ。
綾姉はやはり手帳を読んでいるが、今日はダメ出しという雰囲気ではなかった。
私はシャンパンの舌触りに気持ちよくなりながら、この飲み物を買ってくれた人のことを考える。

。お酒に罪は無い。
では香里さんは罪を犯したのか？
私は自分の問いに答えることが出来ない。

「香里さんの話、していいかな」

「いいわよ。愚痴でなければ」

綾姉が提示した制約は私の口数を少なくする。
そしてその分、会話の密度は濃くなっていく。
お客さんと話しているときには決して見せない彼女の冷たい表情。
でも私はそれを怖いとは思わない。
ありがとう、とすら思う。自分が彼女の求めているものを持っているかもしれない、
という事を期待させてくれるからだ。
私は慎重に言葉を選んで、聞いた。

「このままでいいと思う？」

綾姉は頷いた。驚いた私に今度は彼女が質問してくる。

「どうしてそう思うの？」

「だって、あんなお金の使い方、変だよ」

「どこが変なのよ？ 金は天下の回り物。使っていかなきゃ入ってこないわ」

「それにしたって、もうちょっと意味のある使い方があると思う」

「それが愚痴だって言うのよ」

私は言われたことの意味が分からない。

「ミキは、どうして香里ちゃんがお金を使うか考えたことある？」

「お金が余ってるからじゃないの？」

「ばかね、お金っていくらあっても余るものじゃないのよ」

それは確かにそうだ。けれどそれでは何故香里さんはお金を使うんだらう。
例えば誰かのために何故使ったかを考える。誰って誰だ？ その時点で思考が止まる。
仮にそれを彼女自身として、何のために使ったかをもう一度考えた。

自分が気に入った人を喜ばせるため、自尊心を守るため、税金対策のため……いや違う。
彼女は領収書を一度も切っていない。

何を考えてみても、香里さんに当てはまらないような気がした。
しかしそこまで考えてようやく一つの結論が出た。

「私たちが考えてもしょうがないってこと？」

「そう。私はそう思ってる」

なんて簡単なことだらう。けれどそれはとてもつまらない答えだ。
正しすぎてあくびが出てしまう。私はもう少し考えたいと思った。
その先に、本当の香里さんの思いがあるんじゃないかと思ったからだ。
たとえそれを愚痴といわれても、口に出すまではまだ配慮でしかない。
考えるだけなら誰にも迷惑はかけないはずだ。

私のグラスの中でしゅわしゅわと音が鳴っている。
綺麗な色と綺麗な音。久々にドンペリを飲んだけれど、これってこんなにおいしかったっけ？

「お礼」

綾姉がびっくりして私の方を見た。

「なにか言った？」

「香里さんがお金を使う理由。ありがとうっていう気持ちなんじゃないかって、思った」

額面無視の、ただのお礼。

等価交換を意識しない、言葉としてのお金。私のつたない答えを彼女は鼻で笑った。けれどその後「うん」と頷いて、また「うんうん」と頷いた。笑顔だった。

「それ、いい。その答えの方がロマンティックだわ」

初めて綾姉に褒められたような気がして、私は嬉しくなった。嬉しくて嬉しくて、私の口角はこれ以上ないくらいに上がってしまう。

綾姉が私のグラスを見て、「私にもそれ頂戴」なんて言ってくるものだから、私たちは意味もなくきゃあきゃあ笑った。

そしてひとしきり騒いだ後、綾姉がぼつりと言った。

「香里ちゃんね、プライド高いのよ」

それは私も感じていたことだった。自分が好きなもの以外はまるで価値がない、という言い方を

彼女だからこそ、そう思った。

口や態度にさえ出さなければ、それは決して悪いことじゃないはずなのだ。だって誰もがそうして生きているんだもの。

「あの子はここしかないのよ。自分が好きだと思えるものも、自分が好きなものを知っている友達も、

みんなここにしかないの」

綾姉は「今のところはね」と付け加えた。

自分の好きなものにしか心を許せない。好きなものの中にしかいることができない。

そうだとすれば、香里さんの世界はなんて狭いのだろうか。

しかしそれが全てであるなら彼女は決して狭いとは思わないだろう。

「綾姉、なんでそんなことわかるの？」

「聞いたからに決まってんでしょ」

そういうことは先に言って欲しかった。

不貞腐れている私を無視して、彼女は続けて言った。

「彼女が来るようになってからまだ二週間も経っていないでしょう？　そろそろこの店でも落ち着いてくるわよ。

お金って言葉ほど無邪気に使えるものじゃないからね」

「それも香里さんに聞いたの？」

「どっちだと思う？」

そんなことわかるわけがない。私はレムでずっと綾姉と一緒に働いていたのだ。

それなのに、綾姉と香里さんがそういう話をしているところなんて見たことがなかった。

彼女のことだ、きっと何気ない話をしている間に、香里さんの本心とやらをこっそり引き抜いていたのだろう。

全く、綾姉はほんとにロマンティックじゃない。

「変ね、ドンペリってこんなにおいしかったかしら？」

そう言って綾姉は帰って行った。私は少し笑ってから、あわててドンペリの瓶を見た。

ちゃんとロゼのラベルが貼られていたので、ほっと胸を撫で下ろした。